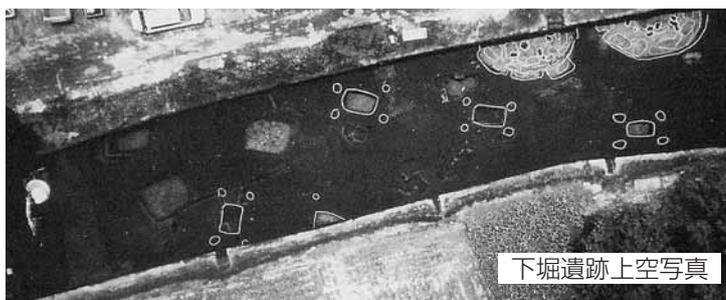


# 歴史を歩く ⑦

町文化財紹介コーナー

## 「下堀遺跡」



下堀遺跡上空写真

### 下堀遺跡

「邪馬台国はどこにあったのか？」

我が国で最も有名なミステリーである。この謎に魅かれて、考古学に興味を持った人も少なくないだろう。

邪馬台国の女王である卑弥呼が活躍していたのは、今から1800年〜1750年前ごろであることが中国の文献の記録で知られている。この頃は「弥生時代」と言われる時代の後期にあたる。さて、この「弥生時代」はどんな時代だったのか？



▲大型住居跡1・2

これまで約2400年前が弥生時代の始まりとされていたが、近年になって、約3000年前が開始時期という説も出てきている。

いずれにせよ、大陸から北部九州に伝わった水稲耕作が、一気に全国に普及し、それを画期として、狩猟採集を主としていた縄文時代の生活スタイルが一変した。これが弥生時代のはじまりである。

よって貧富の差が生じ、身分の差が生まれた。そして、水田に使う土地や水利をめぐる集落同士の争いが起こり、争いの中で、強い集落が弱い集落を服従させたり、集落同士が連合を結んだりして、地域が統合されていった。これが、やがて政治的勢力を持つようになり、小国家、つまり「クニ」が誕生することとなる。「クニ」同士の争いは、全国規模へと発展する。邪馬台国もまた、そんな動乱の時期に存在した強大な国家である。

そんな時代、南九州はどんな状況にあったのか？実のところ、その全貌は明らかにされていない。解明するには資料があまりにも少ないのだ。その中であって、下堀遺跡は南九州における弥生時代の様相を伝える貴重な遺跡である。

下堀遺跡は岡別府集落内に存在する。平成13年〜15年に大隅グリーンロード建設に伴い、計画部分の発掘調査を実施した。その調査の結果、弥生時代中期（今から約2000年前）の大集落が存在していることが判明した。



▲高床式建物の跡

竪穴式住居跡は、全部で17基。うち2基は直径9mほどの円形をした大型住居跡だった。惜しくも、調査区域に現れた大型住居は、どちらも全体の3分の1程度であった。しかし、グリーンロード外に3分の2は確実に残っている。

その他、4本の柱で構成される高床式の建物跡と思われる遺構が5基発見された。4箇所の柱跡の中央に長方形に掘られた穴があるが、何のための穴かは分からない。

この5基のうち3基は、おおよそ東西に直列しており、残り2基はこれに90度向きを変えて南北に直列していた。配列に何らかの規則性があったらしい。

下堀遺跡から出土した土器を整理していると、どうも瀬戸内地方の土器をまねて作った土器や、九州北部で使われる土器も出土しているので、それらの地域との交流があったと言える。このことから、大隅・肝付地域に、南九州と九州北部・中国地方・近畿地方の有力国家との深い結びつきのある国家が存在していた可能性も否定できない。

大崎町内には、実に多くの弥生時代の土器が見つかる。潜在的に弥生時代の集落はまだ存在しているのだ。

【大崎町埋蔵文化財専門員 内村憲和】